

【概要】

「ワークショップ型展覧会を通して見た子供の造形活動の特色」

弘前大学 蝦名敦子

2016~19 年の間に 5 回、同じ材料を用いた造形活動（ワークショップ型展覧会）を、子供を対象に行ってきた。それは、紙を丸めた棒を材料に使った造形活動である。本稿は、その一連の展覧会を相互対比的に振り返る。学校での図画工作・美術科の授業とは異なる制作環境で行われた彼らの活動を、これまでのワークショップの実践から総括し、その造形活動の特色を抽出することが本考察の目的である。

同じ場所で開催してきたことから、本展覧会の題材が毎回、異なることによって、それぞれのテーマが子供たちにどのような影響を与えたのかがわかる。これら一連の活動を以下の観点から全体的に振り返る。a 材料と展覧会のテーマ、b 表現のジャンル（造形遊び、立体や工作の違いなど）と場の設定、c 子供たちの様子、d 特に注目したい形（造形的特徴）とイメージ、e 空間把握—展示空間と造形空間の変容、f 展覧会の成果と課題、である。考察の方法として、まず開催年ごとに各展覧会について、その開催テーマの特徴に焦点を当てながら、上記の観点 a~f について順次振り返る。次に、子供のイメージの問題と、造形空間の関係を全体的に考察し、さらに学校教育のあり方と比較していく。

一枚の紙から一本の棒を作り、一本の棒から造形遊び、立体、工作と行ってきた。その棒からどのように人間のイメージが触発され、形が作られていくのか、一連の流れを追って子供たちを観察してきた。どの回でも、イメージとの関わりが強く、子供たちは作りたいイメージが沸くと、進んで取り組んだ。また、展示物の中に入出入りして様々な形の大きさやその中の空間を感じとり、その形とともに周囲の空間が身体感覚とともに意識されていった。自分と作った造形物との関係、またその造形物を通してさらに周囲の空間の広さが認識されていき、美的な造形空間が創られていった。造形物とともにその空間全体を共有する喜びが、この一連のワークショップ活動では可能であった。

子供たちの造形活動を見てわかったことは、お互いの個性を發揮しながら、みんなで調和のとれた世界をつくり出すことができる、ということである。展覧会を開催するにあたり、事前に常に場を設定し準備したが、常に想像以上の世界が創り出されていった。子供のイメージの広がり—その場にはないものまで想像で補う感覚と、全体の調和を図りながら造形物をつくったり、展示したりする様子を見て、人間のもつ造形感覚が他者と一緒になっても改めて全体のバランスを測りながら發揮されるものであることを再確認できた。

また本展覧会では、自分の作品をつくり出すことのみではなく、参加者自らも展示して皆の作品のよさや面白さを享受し合う喜びを、自然に表現した。つくり出した作品をお互いに享受し合うという行為は、人間同士を結びつけ、そこに美的感応をもたらす。それは学校の授業とは異なった美術の在り方であったが、子供の表現の原点を想起させてくれる。一連の実践を通して人間の「つくり出す喜び」の意味（つくり出すという行為とそれが実現した時の喜び）を再確認するとともに、ここに美術が人間社会にもたらす豊かな可能性のあることを改めて実感するのである。